（1999年），21.6％（2004年），14.5％（2009年），14.8％（2014年），12.3％（2019年）であり，アブリザルが党内で権力を握っていた時期にゴルカル党は選挙で大きく得票率を減らしている。実業家出身の幹部が増えたゴルカル党は大企業に寄り添った政党となり，庶民や労働者の味方ではないというイメージが定着した。そしてそのイメージを象徴していたのが，アブリザル・バクリだった。

ポピュリスト的な政策を採ったところで，そのイメージは払拭されなかった。アブリザルが発案したと言われる貧困層のための無条件の現金給付制度（BLT）は，給付をめぐり汚職やトラブルが多発し，条件付き現金給付制度（PKH）に代わった（ただし，コロナウイルス感染拡大をめぐる経済対策の一環として復活する）。また，彼が国民福祉担当調整大臣であった2006～09年，国民健康保険制度の導入に必要な機関を創設するための法整備はストップしたままであった。保険料支払いに反対する実業家団体が法整備に抵抗していたからである［増原2014］。そのような状況で，国民が彼を庶民や貧困層，労働者の味方と見なすはずはない。アブリザルの国民的人気が低迷し，ゴルカル党への支持が退潮していったのは当然の成り行きであった。

実業家から支援を受けるために彼らの利益を代弁すれば庶民や貧困層の支持を失い，党勢は後退していく。であるならば，政治家や政党はより巧妙なやり方で庶民や貧困層の利益を実現しようとしている姿を見せなくてはならない。多様なアクターの動向や認識をも分析の射程に含めながら，ビジネスと政治の関係を捉えていくことが求められる。

（増原綾子・亜細亜大学国際関係学部）

参考文献

増原綾子．2014．「変わるインドネシアの社会保障制度」『東アジアの雇用・生活保障と新たな社会リスクへの対応』末廣昭（編），167–194ページ所収．東京大学社会科学研究所研究シリーズNo. 56（2014年3月）．

井口由布．『マレーシアにおける国民的「主体」形成――地域研究批判序説』彩流社，2018，327+36p.

「マレーシアは，原住民で多数派のマレー人およびマイノリティの華人とインド人から成る多民族社会である。」この言明に異論を唱える人はほとんどいないだろう。しかし，「原住民」や「マイノリティ」という言い方を受け入れるということは，ある空間を切り取った上で，そこに住む人々を原住性や人口規模で区切る考え方を受け入れていることになる。

また，それらの区切りを無前提に「マレー人」や「華人」と呼ぶことは，マレー人や華人という集団性が太古から存在してきたという考え方を受け入れることにもなりかねない。さらに，そもそもマレー人（著者の言い方では「マレー的なるもの」）や華人を「民族」と呼ぶことは，民族を本質的な存在と捉えることにもなりかねない。このように考えるならば，冒頭の一文は一語一語に注釈をつけなければ一言も発することができなくなる。本書は，その縛りを自らに課した上で，冒頭の一文がどのようにしてマレーシアに関する社会通念および学説になったのかを明らかにしようとするたいへん挑戦的な試みである。

本書ではじめに上記の問いへの答えが示される。すなわち，植民地支配を通じてマレー半島が意味のある空間として認識され，植民地期の最終期に多民族社会というイメージが形成されたためである（序章）。続いて，その論証の方法が示される。エドワード・サイードやベネディクト・アンダーソンの議論を引いてマレーシアの思想史状況を概観し，「マレー人」の存在を所与とせずに「マレー的なるもの」を言説による構築物と捉えるアンソニー・ミルナーやアリフィン・オマールの研究の流れを汲みつつ，「マレー的なるもの」および「多民族社会マレーシア」の構築を明らかにするという本書の目的と方法が示される（第1章）。

第一部の3つの章は，イギリスの植民地政策学によってマラヤという空間認識がもたらされた過程を論じる。

植民地化の初期，スタンフォード・ラッフルズ

やウィリアム・マルスデンなどのイギリス人研究者は研究対象を「マレー諸島」と呼んだ。これに対し，イギリスがマラヤの領域支配を行う19世紀後半以降，フランク・スウェッテナムやリチャード・ウィルキンソンのように「マラヤ」を対象とする研究が登場した（第2章）。イギリス人植民者はマレー人の本来性を「平和で平等主義的な真にマレー的な共同体」と捉え，ヒンドゥ教やイスラム教などの外的なものによって汚染されて純粋性が失われ，マレー性が欠如していると考えた（第3章）。

この考え方はマレー人に受け継がれた。『アブドゥッラー物語』（1849年）の著者アブドゥッラーは自身をマレー人と認識していなかったが，同書は「現地民によってマレー語で書かれた最初の近代的な文学作品」と評価された。ここには，マレー語はマレー人の民族語ではなく，マレー語を学ぶことで媒介される共同体が非マレー人にも開かれていたという認識がうかがえる。これに対し，1941年にマレー語の文法書を刊行し，後に「マレー語の父」と称されるザッバは，アブドゥッラーはマレー人ではなくタミル人であって，『アブドゥッラー物語』は外国語訛りの拙いマレー語を操る外国人の著作であると位置づけた。マレー人を民族喪失の危機から救おうとし，そのため均質で統一された民族語としてのマレー語を求めたザッバは，「マレー的なるもの」をマレー人とそれ以外に分けるイギリス人植民者の考え方を内面化していた（第4章）。

第二部の5つの章では，アメリカの地域研究がもたらされることでマラヤがプルーラル・ソサエティ（多民族社会）と認識される過程を論じる。

1930年代にJ. S. ファーニヴァルが提出したプルーラル・ソサエティ論は，全体社会を構成する各社会集団では共通意見が欠如していると捉えており，イギリス人植民者によるマレー性の欠如の議論と重なっていた（第5章）。第二次世界大戦後にアメリカの政策研究として地域研究が成立し，アメリカの大学に東南アジアに関する研究科が作られ，地域研究および東南アジアという地域概念がもたらされた（第6章）。ファーニヴァルの議論の対象はビルマと東インドだったが，東南アジアという地域認識が成立したことでマラヤにもプルーラル・ソサエティ論が適用され，マレー人によるマレー研究学科のようにエスニック・グループ別の研究科が作られた（第7章）。

独立後のマラヤでは，マレー語の国語化をめぐってマレー語とマレー人性の捉え方に多様な立場が見られた。文学者グループのASAS50はマレー語とマレー人を結びつけることを避けてマレー語を道具とみなした。これに対して国立言語出版局の雑誌『デワン・バハッサ』はマレー語を「精神」と呼び，それは植民地支配によって失われたがマレー語を学ぶことで非マレー人でも獲得できるとした。ザッバはマレー語とインドネシア語の統合に心を砕き，マラヤという植民地空間を越えたマレー諸島を包括するマレー人の共同体を構想した（第8章）。

マラヤとボルネオの統合によりマレーシアが成立した後，1969年の「民族衝突」事件（5月13日事件）を経てブミプトラ政策が導入され，マレーシアが多民族社会であるという言説が制度化された。国際マレーシア学会議の「マレー世界におけるプルーラリズム」のパネルの議論に見られるように，今日のマレーシアにおいて国民国家という概念は強固である（第9章）。

終章では，地域研究は人が国民国家概念から自由になる契機になりうるかが論じられる。アメリカ発の地域研究の可能性に肯定的であるアンダーソンに対し，著者はアメリカが東南アジア研究の中心であることへの意識が抜け落ちていると批判するが，それでも著者は地域研究が非ヨーロッパ地域に展開することでヨーロッパの国民国家概念に揺さぶりをかけていることの意義を積極的に捉えようとする。その上で，地域研究の延長上に「地球」という閉じた全体性が想定されることを批判する著者は，「惑星的なもの」として自らを想像しようと試みるガーヤットリー・スピヴァクの議論に希望を見出す（終章）。

本書は，イギリスがマラヤに拠点を築いた18世紀末から第一期マハティール政権の終わり（2003年）頃までの長い期間を対象にしており，どの事例を扱うかという選択が問われることになる。マ

ラヤの民族認識を議論するのであれば，1930年代の「マラヤン人」をめぐる論争や1940年代の「バンサ・ムラユ」（マレー民族）の定義についての議論に言及しないわけにはいかないはずである。また，マラヤという空間認識を議論するのであれば，マレー人右派がマラヤとシンガポールを切り離して認識する契機となった1950年の「ナドラ事件」に触れずに済ませることもできないだろう。これらの議論は本書が参照するアリフィンの研究［Ariffin 1993］に詳述されているが，本書は認識を論じるもので実態は対象にしないという立場をとり，これらの事例に言及していない。

もっとも，このことは著者にとって織り込み済みの批判であり，事例の選択の問題に囚われると本書の議論の本筋を見失いかねない。本書は，誰からも批判を受けないがそれゆえにどの議論にも貢献しない研究になることを嫌い，「支配的な読みにあらがって読み，他者を呼び込みながらテクストを読んでいかなければならない」（p. 323）と自らに課して，通説の攪乱を積極的に仕掛ける。

そのことが象徴的に現れている箇所がある。本書は，ザッバの論説からbahasa kacaukanを引用し，kacaukanに「無秩序な」や「混乱した」という意味があることから，マレー語をbahasa kacaukanと見るザッバの見方はマレー語の統一性を攪乱し，混乱させ，汚染していく可能性があると論じている（p. 254）。ジャウィで書かれた原文はkacaukanではなくkacukan（混合の）と読むのが妥当であり，kacukanに「無秩序な」や「混乱した」という意味はないため，著者の誤読ではないかと思われる。ただし，ザッバの意図についての著者の読みが，国民国家概念を攪乱し，混乱させ，汚染しようとする本書の意図と重なっていることを考えるならば，これは著者が読者に仕掛けた意図的な「誤読」かもしれない。実際に，評者はこの部分で立ち止まり，混乱し，原文や先行研究に改めて目を通すことになった。

この他にも，マレー語の国語化を唱えたASAS50を保守層と呼んでいる記述など，評者は本書のいくつかの箇所で立ち止まることを余儀なくされた。その意味では，他者を呼び込みながらテクストを読んでいくという著者の思惑は実を結んだと言えるだろう。ただし，仮に著者にそのような意図があったとしても，通説にも言及するべきではなかっただろうか。

このように個別の記述にはにわかに納得しかねるものも含まれるが，そのような議論を含めて本書が公刊され，しかも日本語で刊行されたことを高く評価したい。マレーシアには人間集団を示す語としてrace，community，nation，ethnic group，さらにマレー語のbangsaやkaumなど多くの言葉がある。これらの区分が日本語の「民族」や「国民」の区分とずれているため，過去の研究はこれらの言葉をどのように訳すかにそれぞれ苦心し，訳語の工夫を通じて議論が積み重ねられてきた。本書を日本語で発表したことには，翻訳が持つ限界を強く自覚しつつ，先行の議論の蓄積の前に論争的な研究成果を晒し，批判の受け止め役を買うことで研究全体の発展に資するという著者の意気込みが感じられる。

その意気込みに敬意を表して2つのことについて応答を試みたい。1つはアンダーソンの議論の読みについて，あるいは本書の目的についてである。人が国家や民族という区切りを認識してしまうことを批判する著者は，アンダーソンを，植民地諸制度が植民地という区切られた空間認識をもたらし，その中で民族という区切りを生み出したと見ていると批判する。しかしアンダーソンの議論は，『比較の亡霊』にも見られるように，人は個として自立と解放を実現することができ，そのような個の集まりが集団を構成してもそれ自体は集団間の対立や競合をもたらさないというものであり，区切りに積極的な意味を見出していない。アンダーソンは，区切りが生じると相互の対立や競合が生まれることを批判的に捉え，そのような対立や競合が脱植民地化の後にも継承されていると批判する。アンダーソンの議論をこのように理解する評者には，アンダーソンと著者が目指している地平は同一であるように見える。

もう1つは地域研究について，あるいは本書の方法についてである。本書は「マレー人」や「民族」などの概念に対しては本質主義を避けるため細心の注意を払っているが，「地域研究」にはその配慮

は払われていない。本書は地域研究を一般化して論じているような書き方がされているが，実際には第二次世界大戦直後のアメリカの敵国研究としての地域研究に限定された議論を行っている。

地域研究は，敵国研究に1つの起源を持つとしても，マレーシアや日本を含む各国でそれぞれ発展を遂げてきた。比較的新しい学問分野で定義が十分に定まっていないことにも助けられ，地域研究は隣接分野を次々と取り入れて膨らんでいくことで内なる多様性を増すとともに，その中から地域研究のコア的なものを打ち立てようとする動きと相まって，地域研究はあたかもそれ自体が1つの生き物であるかのように成長し続けてきた。その過程で，地域を閉じたものと捉えることの問題を自覚した上で，地域と切り結ぶ研究を目指すという積極的な意味を込めて地域研究を名乗る研究も行われてきた。地域研究を本質的に捉えずにその絶え間ない混沌性に向き合おうと藻掻くことにこそ，慣れ親しんだものを異化することで国民国家概念の軛から解放されるとスピヴァクの議論に希望を見出そうとする著者の方法と通じ合うものがあるように思われる。

研究対象の認識と著者の認識が交錯する本書を読み解くのは一筋縄ではいかないが，著者の研究者としての生きざまが刻み込まれているような読みごたえがある。序説に続く本論でさらにどのような議論が展開されるのかに期待している。

（山本博之・京都大学東南アジア地域研究研究所）

参考文献

Ariffin Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945–1950*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

アンダーソン，ベネディクト．2005.『比較の亡霊――ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介；高地薫ほか（訳）．東京：作品社.

小野真由美.『国際退職移住とロングステイツーリズム――マレーシアで暮らす日本人高齢者の民族誌』明石書店，2019，284p.

本書は，文化人類学の民族誌的アプローチを用いて，退職後の日本人高齢者のマレーシアへの移住やメディカルツーリズムを含むロングステイツーリズムを，マレーシアと日本の観光戦略についての考察や，当事者へのインタビューに基づく事例分析によって明らかにしようとする試みである。なお，本書は観光学術学会2020年度著作賞を受賞している。

本書は，7章から構成される。

第1章「序論――高齢者の国際移動を捉える視点」では，「グローバルな人の移動」を対象とした従来の移住研究や観光研究，とりわけ，本書の事例に相当する「国際退職移住」に関する先行研究を検討し，人の国際移動に関するマーケットの役割も加味しつつ，本書の視座と目的が述べられる。本書の特色は，国際退職移住に関する研究から生まれ，観光と移住の中間領域を捉える概念である「ライフスタイル移住」を主な対象としている点にある。「ライフスタイル移住」とは，「すべての年齢の比較的裕福な個人が，生活の質を向上させる場所へ一時的あるいは恒常的に空間的に移動すること」（p. 30）である。

第2章「国際退職移住の商品化――ロングステイツーリズムの成立」では，送り出し国である日本社会の状況や日本人の国際移住の歴史，グローバル化の進展に伴う観光現象などの様々な観点から，少子高齢化が進む日本社会において高齢者の国際移動が発生する社会経済的背景を考察している。著者は，日本人の国際移動の歴史を，1）明治期の「出稼ぎ」，2）帝国主義下における「植民」，3）日系企業の海外進出に伴う日本人駐在員，4）1980年代から顕著になる留学やワーキングホリデー，ロングステイという4段階に分け，4）は，個人の選択や意思決定が重視される社会状況が反映されていると指摘している。後半では，特にマレーシアにおけるロングステイの商品化のプロセスを，南欧やオセアニア，タイやフィリピンなどの東南アジア，台湾といったマレーシア以外の事例と比